

玄武朱雀

泉鏡花作

—

「開けねえか／＼、やい、唐變木、狸穴の次郎さんだい。かう、誰だと思つてやあがる。」

「鄙に立ちはだかつて、喚くのは、職人體の壮校で、自ら名告つた狸穴の次郎さんと言ふのである。」

「やい、新宿へ交際ふのが嫌だからつて、人の手に喰ひつくといふ奴があるかい、痛えぞ、畜生、何うしてくれるんだ、やい。」

戸の内は寂りして、返事もしないで静まつて居る。取合はないから戸外の壮校は張合がなくなつたか、黙つて酔眼をとりとニつた。小路の前後をニしたか、其目を返して半被の左の袖をかゝぐつて、二の腕の處をぢつと見た。

漲るやうに血の通ふ、筋の張つた二の腕に、文久錢ほど血がにじんで、輪取つて腫れたやうに成つて

居た。

眉を顰めたが、其の手を袖の中へ納れて、長く露はした右の手の、握拳でどん／＼と部を打つて、

「見る、こん畜生、血が出るぜえ、串戯ぢやあ無え、何だつて人の手なんぞに喰ひつくんだ！ かう、石塊で打缺いたンかな、鳶口を叩き込みやあがつたんなら料簡してやらあ。人をつけ、馬糞ツ齒で、わんぐりやられた奴を袖の中へしまつて歸られるかい。やい、合點ならねえ、唐變木、出て来て何うかしろい、出て来ねえか。やい、」

「騒しいぢやあないか。何うしたんだよ。」といひながら、棟割長屋の一ならびに寢静まつた中の、一枚破の入った板戸を開けて、鐵のやうな冷たい戸外へ、寝衣の上へ半纏を引懸けた、つゝかけ下駄で櫛卷の天窗を出したのは、隣家の車夫が女房である。

「静におしよ、誰だ、次郎さんだね。」
「つとと出て、懐手のまゝ聲をかけてひつたり寄る。無性に戸をたゝいてた壮佼は、向直つて瞳を据ゑ

て、

「何でえ。」

「あら、何だぢやあないやね、お前、町内が割れるやうぢやあないか、何うしたと言ふんだね。」

「餘計なお世話だ、汝、三吉が女房だらう。」

「あゝ、御念にやあ及ばないよ。」とうつくしい染めた齒で莞爾する。

壮伎はつゝかゝつて、

「だから話せねえツてんだ。打棄ツとけえ、入らざるこツた。へい、媽々のある野郎だの、亭主のある女子に我のいふ理屈が分るかい。次郎さんが相手にやあしねえや、引込んでろ。」

くるりと背向いてまた拳をぶつける――どん、どん、どん、どん。

「開ける、やい、唐變木、こん畜生、齒くそだらけの媽々なんか大事にしゃがつて寤むでら。我が奴あ鹽磨きだぜえ、湯錢が上つたつて、盥で濟ましと

くやうな吝けちなんぢやあねえ、なあ、女房かみさん。」

と云いつてまた見返みかへつた。壮伎わかものは掌てのひらで頬邊ほつべたを撫なで、
見みせて、

「え、おい、これが分わからねえやうぢやあ、お前まへな
んぞも、盃たしひの部ぶだ。」

「餘計よけいなお世話せわだ。」

「へむ、顔つらでも洗あらへだ。」

「お前まへは酔よつてるんだよ。可いいから騒なう々くしくつて
仕しやう様ようがありはしないから、どん／＼やるなあよして
おくれ。何なんだつてまた野郎やろうが戸とをたゝいてる位くらゐ氣きの
利きかないツたらありやしない。翌あす日にでもなつたら
出で直なほして来くるさ、ね、左さ様ちぢやあないか、見みツとも
ないや、ねえ、お前まへ。」

と氣きが強つよいのだから女房にようばうは欠あく伸びまじりに無遠慮ぶゑんりよに
いつて退のける。と黙だまつて聞きいて居あたが、思おもひの外ほかで、
食くつてかゝらうともせず。

ひどく落着おちついたものいひで、

「いや、分わかりました。」と、目めが覺さめたやうに言い
つて頷うなづいたが、其そのまゝ身みを返かへして戸口とくちを離はなれた。

「何をいつてやんだい、黙つてりや、何だ、齒くそだらけ。」

と湧上がつたやうに吼り立つて、ばた／＼と人の立つた氣勢。

「可いからさ、まあ、あれさ、およしつてばねえ、」とおろ／＼したうら少い女の聲、二三度あせりあつて、引摺られるやうな物音がする。爾時むかうの辻の角まで立去る壮僚を見送つてた彼の車夫の女房が、板戸へぴつたりと兩手を縫つて、

「源さん、うつちやつてお置きなさい。もう去つちまつたよ。居やしないから。」

「女房さん難有うございました。ねえ、まあ、お前さん、ぢつとしておいでよ、可いから、いえね、つい、良人も酔つてたもんですから。」と戸の内へ返事をして、若い聲は立つて出さうにする。

「まあ、お休みなさい。」とおもてから取押へるやうにいつた。

「唯今開けますから、」

「いえ、またあしたの事にしませう、左様ならお休みなさい。」

いひすて、女房は身を退いた。其時内なるが近寄つて、直ぐ蔀の際で、

「何うも濟みません。」

女房は八ヤ自分の家の戸口に居て、これには答へないで、身ぶるひした。

「おゝ、寒。」

半纏の袖を引重ねて、束髪たばねがみの白しろい顔かほで、ちよいと振返つて空を見て、

「清ちゃん、良月よ。」

といったが、土間へ嵌まつたやうに其後姿は隠れて、手は見えないで、がたりと戸が閉る。

長屋は六軒の棟割で、隙間だらけの羽目、蔀しとみで一ならび。これが古びて黒くなつて居るのに、揃つて板屋根が新しいので、薄く雪を被つたやうに月あかりで眞白である。

皆平屋で奥が浅く、廂が矮い。此六軒の長屋のは

づれに新粉細工の影法師のやうな、ぼやけた枝の、
梢の鈍な、幹の高い、桐の樹が一本葉の落盡したの
が、磨ぎ出した星のキラ／＼とする中に空高く立つ
て居る。梢のあたりに硝子窓が見える、二階家で。
瓦屋根の背後は、判然した黒い森の寒月は、恰ど其
上に蒼ずんだ色で冴えて居るので、北から東へ弓形
に麻布の一方を貫いた、其の小路の見渡す果に、月
と摺れ／＼に靄が掛つて、鏡の中の繪である如き澄
渡つた此長屋のあたり。屋根、軒端、道の上、斜に
傾いた電信の柱、其線にまでも、音はしないで、犇
と霜が下りる、森とした夜は一時であらう。

小刻の跫音軽く、頬被をした二人の身體、町の片
側に肩と肩とくつきあひ、手首を引込めた袖口で、
三味線の柄を眞直に脇下に掻込んで、男の方も、二
人とも、下を向いて頭を垂れて、足並もちやんと揃
ひ、同一處を見詰めながら、傍目も觸らず、ものも
言はないで、北の方から刻足で來。あの傾いて立つ
て居る電信柱を背後にすると、偶然立停まつて一齊
に顔をあげたが、目を見合つて道を片除ける。

前途ゆくての辻つじの角かどへ、身みを翻ひるして露あらしれた、半被はつび、股引もひきの、跣足はだしで、向顛卷むかづはぢまき、まくりでに鳶口とびぐちを提ひつけたのは、先刻さつきの壮佼わかもで。いま辻つじの角かどから翻ひるつて出でると、横よこなぐれに成なつて踏直ふみなほした勢疾いきほひとく、黒くろい姿すがたが流ながるゝばかり。月つきあかりの晝ひるのやうな、小路こうぢを來きたり、恰ちやうど二人ふたりがたゝずんだ、電でん信しん柱ばしらの筋向すぢむかひになる源げんが家いへの蔀しとみへまつしぐらに身みを以もて飛とび懸かつた。

氷を砕く音がする、突然羽目板へ二ツ三ツ黙つて
 鳶口を打ち下した、壮伎は足場を取つて、胸を張り、
 得物を眞向に振被ぶりながら身を反らして、

「次郎さんだい、出直して来たんだから然う思へ。
 屋臺骨を、畜生、たゝツこはすから覺悟をしる。」

まつすぐに立つて、

「状あ見やがれ。」

ばり／＼と打あてたのは、確に羽目板の眞中を割
 つた。板目に食ひ込むだ、鳶口の尖を、こぞつて兩
 手で後ざまに引きながら、

「えゝ！ 板までが、状あ、へばりついて手答が

ねえや、コン畜生！」と、憤つたやうにまた喚いた。

「何を！ 獣め。」と息巻荒く、内では躍上つた
 けたゝましい物音で、どし／＼と飛出しさうに聞え
 る。

「およしよ！ 危いから、あれさ、酔つてるぢや
 ないか、怪我をしちや詰らないわ、ねえ！ 向不見

ぢやあないか、鳶口なんか持つてるから。」
と飛隼とびすがつて押留おしとめる。若い女房にようぼうの聲こゑは、あわてゝ居ゐるから高いので、いらだつてる良人をととより、仕懸しかけておびき出ださうとして、じらして居ゐる戸外おもての次郎じらうが耳みみへ眞先まつさきに入るはひるので。

「状さまあ、いびたれ女あまめい、汝うぬも若わえ癖くせに料簡れうけんの悪わるい奴やつだ。すべつため、鳶口とびくちや、鐵管てつくわんが恐こはくツて町内ちやうないの若い者ものが女房にようぼうになれるかい。こんな時ときが打うつてつけど、次郎じらうさんがたゝきのめして、抱心だきこゝち地の可いいやう、汝うぬが良人やどろくのむくんだ顔つらを鍛きたへ直なほして遣やるから、難ありがた有おもいと思おもつて、やい、源げんを手放てばなして戸外おもてへ出だせえ。男をとこの珍めづらしい女をんなにや、氣きの毒どくだから、なけなし一帳いっぢや羅らの良人やどろくを叩たき殺ころしてな、此寒このさむいのに不自由ふじゆうをさせるやうなことあ、この如に來よ樣ら遊あそばさねえ。ほんの一寸つとからだ何處どこかに抜裏ぬけうらを拵こせえてやる位くらいなものよ。はゝゝゝ、」と快こゝろげに笑わらつたと思おもふと、また言ことば鋭えいく、
「貧乏びんぼう神がみあ其處そこから逃にげ出ださあ、やい、まだ出でねえか。え、おい、チヨツ、も一ツ景氣けいきをつけてやれ。」と更さらに抜ぬいて取とつた鳶口とびくちを上段じやうだんから打うつてあ

てた。

「放しねえ、放せつたら、えゝ！ あ、あんなこと、言はれて、汝なんざ、何だ。おたふく、嬢々でも何んでもねえや、嬢々なんぞ、汝、畜生、いま出るから逃げやあがるな。」と内では地踏鞴を踏んで憤る。

「さう来りや頼母しいや、さあ、出る。お手の物の鳶口様、お待兼だ。」

「何を鼻ツ垂、汝、安穩に内へ歸つてお茶漬が食べられると思つてると間違ふぞ。えゝ！ これ放さねえか、やい放さねえか。」

「あれえ！ 女房さん、女房さん、お隣の女房さん、」と取押へてるのは泣聲をあげた。

鄰家の車夫の女房は、さつきの今で悉く様子を知つて居よう。出直して来いなどゝ言つた、當の敵手は自分なので、かゝりあひ免れ難いだ。

分けて入らうには鳶口が劍難だから裏口へ廻つた

らしい。

直ぐ来て、源の内げんうちで其聲そのこゑがする。

「まあさ、かつたいと棒打ぼううちだあな。お前まへさんに嵌はまる役やくぢやあないから、此方こつちは大人おとなしくしておいでなさいよ。まあさ、」

と當惑たうわくして、これは愚痴ぐちをいふ。

「だからお前まへさん、落着おちついておいでよ。よう落着おちついておいでつてばねえ。」

あとは口早くちばやに女二人をんなふたりがくどうも何か言いふのが聞きこえ、男をとこのブウノ、が其それに交まじつて、一緒しよに奥おくの方ほうへ遠退とほのいたが、内うちはまた静しづかになつた。

若わかい者ものは憤然ふんぜんとして開ひらき直なほり、

「いよノ、出でねえな、可よし、こんな家うちや鳶口とびぐちの尖さきへ引ひっかけて葛西街道かさいかいだうへ投なげ出だしてやらあ、覺悟かくごしろ。」

と滅多打めつたうちをやる、この景氣けいきでは、眞個ほんたうに壞こわすかもしれない。

四

暴れる音が打返し、打返し、また立續けに、寢靜
まつた、寂として、眞蒼な、明い町を貫いて亂調に
響き渡る。十間ばかり北へ隔つた同一町の辻のあた
りを、兩側へ左右に開いて、兩人、月夜の明暗の中
を打並び、人家の廂の下と、また溝の縁を渡つて、
歩くにつれて斜形に、其背と、腹と、背と腹とを見
せながら、靜かに、落着いて、足袋蹴、音も立てず、
然も高く地を踏むで、鷹揚に練るが如く來た。

右なのは、乳の下から斜めに落して、鳶口の長い
のを腰に横へたが、片手を懐にして、片手の肱に眞
赤な線を描いた、縦に三番組と墨で入れた提灯を抱
いて居る。

左なのは、少それよりも小造で、これはおなじほ
どの鳶口を提げて、柄を落とし、頭を胸に取つて逆に
持つて居る。これも片手を懐にして、いづれも鳶の
装束で身を鎧つて、頭巾を目深に被つて、口あても

しつかりした、目ばかりの其顔を、兩個ともうつむけて、近い處は目を配り、遠きあたりは耳で聞く、一寸も隙の無い身構。提灯の灯は薄く黄色を帯びて、照らさないで、其形ばかりが見える。厚子の鎧は霜を浴びたのに、凍てた月の光が射して、黒い姿を白けさした、濡れた灰のやうな色で固く冷かにキラ／＼するのを、身肉の形に、しつくりと着こなして、浮いてあがるやうな身軽な步調。咄嗟目を配る其瞬間、ものゝ音を聞定めて、また一步に見て、一步に聞いて、更に一步を進めながら、刻々、町の一部分を巡見する、火の番の意氣、あたりを拂つて、悠悠々と近づいた。

眞中を通つて、さつきから若い者が壞方をやつてるのを、電信柱の前にゝむで無言で見て居た彼の夫婦連の藝人は、此時小走に行過ぎたが、五六歩離れると小路の中で、三味線を抱へた方が、しなやかな腰をのして一寸立停まつたと思ふと、一步先になつた男のあとを追ひつゝ附着いて、齊しく刻足で急いで行く。

其姿を、右なるが振返つて、舊來た方へ見送つた時、左なるが屹と前途を望むで、いま勢餘つて、よろけなりに得物を横に振つた、源が、軒下の若い者の、手と足と動いてるのを見て取つた。

兩個は言ひ合はせたやうに左右から身を寄せて、道中でひつたり肩を合はすと、双方逆に三角の形をした、其刺縫の頭巾の中から、鋭い目と、愛くるしいばつちりとした目とを見合はしたが、瞳を返して、再び亂暴な若い者の舉動を見て、一緒にやゝ其足をはやめた。

あばれ者が獨で景氣をつけて、ありやりやん／＼と、懸聲で打込みながら、夢中で壊してゐるから些少も氣が附かぬ。

背後へノソリと寄つて、

「おい。」と落着いた聲を掛けたのは脊の高い方で、提灯を持った手を組んだまゝ一指をも動かさないで然う言つた。それでも構ひつけぬからまた力を入れて、

「騒々しい、こら、巫山戯るない。」ときつすり
言ふ。

「誰だい。」

「我だ。」

「何奴だい。」

「我。」

「何だ。」

「我、我。」と言つたばかりで、澄まして横を向
いて居る。若い者は躍起となつて鳶口を持直した。

「我、我、へむ、何を言つてやあがる、見損なつ

たか、狸穴の次郎さんだい。」

五

「可いよ、分つた、其次郎さんが何うしたんだ。」
と、これは自若として言つた。

「源が屋臺骨を叩き壊す分の事よ、何も六ヶ敷こ
とあねえ。」と活々した目をみる。

「止しな、止しな、詰らない洒落だ。また木葉の
やうな喧嘩だらう。」

「何うして叩き壊すやうな喧嘩だ。構ふない、へ
む、差配さんぢやあるまいし。」と冷かに言放つて、
また得物を取直すと、手甲かけた大きな掌で其腕を
押へ、

「止せよ！」と言つた、が力が入つたので、若い
者は置いて放した。

「畜生手を出したな。」
キツと立直つて、對手は擇ばぬ、誰でも来いで、
若い者は喧嘩に餓ゑて居つたと見える。

火の番を當の敵手にして一ツ取組んで、あまり錢
がないから、何處かへ怪我でもして見たいのだ。

取つて鳶口を構へると、平和な目ばかり、頭巾の裏に微笑を含み、無意識に垂れて居た、片手を上げて提灯を持った手を袖口で組合はして、對手は平氣で居る。

「驚くな！」とばかり身悶えして、アハヤ掴みかゝらうとするトタンに、すつと寄つて同一扮装ながら、身の細りした、小造で肩の優いのが、清い聲で、

「ちよいと。」

猶豫ふのに引冠せて、

「お前さん、又かい。」

と言尻の切れたもの言ひである。これを聞くと、あばれものは其の（あばれ）が懷中から抜け出して、フイと失くなつたやうに落膽した。

で、きよと／＼として、ぞつと見ると、——
重いから横に弛んで、片目を蔽つた頭巾の縁を、眞直に揺り直した。

瞳の清しい色の白い、くつきりした、うつくしい、眉も翻れて伺はれさうである。

聞える。

「串戯ぢやあねえ。」

「甚さんたら、作聲をして可笑くツてよ。」

「串戯ぢやあねえ。」

「次郎さんが、また大時代をいつてるぢやあありませんか。源が屋臺骨を叩き壊す分の事よッてお前、鳶口を振つて木遣をうなつて居てよ、お演劇のやうで私おもしろかつたわ。」

「串戯ぢやあねえ。」

「でも、やい、手を出したなツて、お前さん、キツパリとなつて威勢が可かつたこと。」

「串戯ぢやあねえ。」

「一人で居るとまるで見違へるは、お前さん、父上の前で、膝小僧を出して、畏つておいでの時とは別の人のやうよ、可かつたねえ、」と擦られたやうに身を揺つて、手甲かけた大きな嵩張つた掌をしつくり二個合はせたを、軽くボンと拍いた。

若いものは苦笑ひで、

「串戯ぢやあねえ。」

六

「へい、へい、御鼻眞に難有う存じます。いえ、
 恚う申しちやあ我慢のやうに聞えますが、全くでさ。
 番太の菓子を召食つた舌でなくツちやあ私等が鮨を
 食つちやあ下さりません。」

何しる屋臺店で汚うがすからな、砂だらけだとばかりで、門構の中に住まつてようといふ旦那方は、
 振向いても見ちやくれません。田舎ものでさ。」
 と小手に腕力を入れて、拭巾をぐいと緊め、海苔を巻いて居る屋臺店の鮨屋の亭主は、片頬に笑を含んで上を向いた。

「はゝゝ、ねえ、旦那。」

「ぢや何か、割に賣れないのか。」と屋臺の陰の
 暗い處で、亭主が腰を休めようといふ、小さな床几
 に腰を懸けて、少し横顔を見せて亭主にものを言ふ
 のは、二十八九の品の好い瘡形の男である。色の淺
 黒い、苦み走つた、其癖何處か鷹揚な、柔みのある、
 おつとりした眼鼻立のしまつた人物で、少しのびた
 頭髪は横撫にひつたり額を環取つて、帽子の形は印

されてるが、被つては居なかつた。

亭主は二ツばかり鐵砲卷を軽く叩いて、暖簾越に霜のやうな月の大路を透かしながら、

「何まあ、何うにかやつちや居りますが、異なことはありません。何うせ分りませんからな、旦那の前ですがカラ話せませんよ、全くでさ。私が家の鮨を食つてやらうてえ方は、かう申しちやあ何ですが、えゝ、贅澤です、驕つてるんだ。」

「意見をいふな、だから前ならば一錢といふ處を頂くから可い。出来たら早速頂かうぜ。」

「いゝえ、價のこつちやありません。口の悪い。」

と莞爾して、俯向いて亭主は、片襷かけた襟許を扱いたが、其手で、庖丁を取つて眞中を切つて四にした。

「召あがりまし、お茶は拂いてますか。」と斜めになつて手を揉みつゝ、地に置いてある火鉢の中を屈んで見る。

品の可い客は、綿の薄いのを無造作に三枚襲ねた、
兩足で跨いで、土瓶を掛けたまゝの跨火鉢をやつて
居たが、甲斐々々しく袴の短い、も一ツ衣込で居る
かすりの羽織から、しゃツきりと手を出して、細い、
小な、火箸を取つて炭をほじつて見て、
「可からう。」といつて、其手が上に出ると、仰
いで一個取つたが、俯向いて火鉢の上で食べるので
あらう、屋臺の蔭に姿が隠れる。

「あとは鮪にしよう。」と、やゝあつて其眉の秀
でた顔が見えた。

「まだ食りますか。」

「食べるよ。」といつた姿は、また屈んで見えなく
なると、カサノゝと炭火を突く音。

其時衣ずれのするのが聞えて、「おゝ！ 寒

い。

「もやがすっかり晴れましたから、恐ろしく寒じ

て來ました。」

「良月だ。」

「此寒いのと、馴れつこに成つてるのとで、お月
様なんざ氣がつきませんが、宛然かう海の底にでも
入つてるやうな景色ですせ、更けました。」と亭主

はちよいと手さきを拭ふ。

「一時か知ら。」

「もうそんなものでございませう……。」と
いつて黙つたが、飯をならべながら見返つた。

「此大道商人といふ奴は、よく刻限を聞かれるも
んですが、ねえ、旦那。」

「大きに、」とばかり、客は其顔は上げずに言ふ。

七

「演劇なんぞにも能くやりますな。大抵夜鷹蕎麥が掛りますせ。蕎麥屋。へい。何時だらうの。四ツでもございませうか。ふう熱くしてくんねえ、かう、天水桶の水を汲込むツて言ふが眞實か。御串戯おつしやりまし。手前のは神田上水を絹漉にいたしまする。そんなに手間が取れるのか、道理でぬるいや。御串戯おつしやりまし。あい、と代を置く。毎度難有う存じます。と荷をかついで下手へ入りますぜ。あとは、四てんで忍と言ふのになります。皆作者がやるんださうで、故くツていけません。旦那鰯屋をお使ひなすつて、彌助や、何時だ、は新らしうがす。え、何ですかい、矢張そんなこともお作りなさいますかい。」

「何をさ。」

「そんなものでさ。」

「何、詰らない、何のこつた。」

「だつて、何で在らつしやいますとね、其何なんぞおやんなさるんださうで、」

「お前の方が餘程作者だ。」

「いえ、おかくしなすつたつて、旦那ア黒頭巾ですな。」

「何のこツた、知らん。」といった、客の言は嚴格であつたから、亭主は心着いたものと見える。浮いた調子に笑つて紛らかした。

「はゝゝは、黒頭巾といや、今夜外套も召しませんな。どちらのお歸りでございます。」

「宅から來たさ。」
「大分お晩く、いつも書生さんをおつかはしになつて下さいますが、お寒いのに何うも難有う存じます。何ですかい。奥様はおあんなさりませぬので？」

「無いよ。」と投げるやうに言つた。

「道理で。」

「何うした。」

「何うして、奥様が今時分お出しなさりますもんですか。」

「うまいこと知つてるな、お前は持つてるのか。」

「何、ありやしません。」

「舊から、」と口を挟んだ。

「いゝえ、ございました。濱で三階造の家を持つて遣つてました時分にやあゝりましたが、こんなになつてから居なくなつたんでさ。出て参りましたんで。婦人てえ奴は實のあるもんですぜ。(決してお前さんが身上をすつて、其日ぐらしになつたからつて、其で出て行くのぢやございません。夜一夜大道で、お稼ぎだから、皆が寝る時分に寝られませんか。それぢや、女房の役目が濟みません。)ツていやがつてね、其ツ切でがす。それから旦那え、十年あまりも一人でやつてますが、面倒ツ臭え、憚りながら嬢々なんぞ持つて居て今時分までこんなことをして居られるもんですか。何うして女房なんか附いてちや、こんな心持のいゝ旨え鮓を、旦那に夜更てから食べさしてあげますことが出来ますものか。」

意氣昂然として言つた。客は胸を正して眞直になつたが、屋臺の中へ凜とした其面が出た。

「何うも左様だらう。此位旨いのは何處にもないから、大方、女房のない男だらうと思つて居た。」

「へい。」

「私が行く處に床屋があるんだ。いつも病身で、初中苦い顔をして居るが、名人といつて可いんだね。其代餘程折がよくないとあたつちやあくれないが、矢張り矢張りひとりものさ。お前とをんなじで、私の顔さへ見りや莞爾々々するんだ。其上手なことツたらないぜ。」

「へい、何しろお氣に適つて結構でございます。床屋と鮎屋はひとりものに限りますな。」

といつて呵々と笑つた。

「何、然うとは限らない。」と客もまた微笑んだ。

「女も何でさ、縫のある裨褱や、友染の長襦袢で押廻してる内あ可うがすけれど、媽々となると、一體何ですぜ、女房に不景氣はついてまはるもんですぜ。」と少い威勢のいゝことをいふ、其癖、顔がといふと、間のゝびた、殊に頤の長い、目のきよとりとした、福相で、俳優某が二人袴の高砂尉兵衛といふのに肖て、年はゝや四十八九である。

「不景氣ばかりぢやない、第一お前世間ぢやあ女房といふものは家を拵へるものだといふけれどな、然うぢやあないよ、却つて破の基だ。疾い處が女房のある長屋なんざ、鳶口で壊されるわけのものだ。」と眞面目にいつた。

「何、まさか。」

「處があるさ、私ん處の近所に近い頃越して來た少い夫婦が居るが、何か植木屋の下まはりだつて、二人とも柔和いんで長屋中の譽物だつてよ、勿論なかゞ可いとき。然うするとお前、今夜鳶口で以て部

を打抜きに來た若いものが有らうぢやあないか。夜中だ、ぴり／＼と硝子戸へ響くから、何だらうと思つて、月明で見ると、遣つてら！

月も良かつたし、何うするか知らんと、それから門へ出たが、一人もんだらう、あの若い奴も。何うして女房持ぢやあ木遣で打壊をやらうなんて、小氣味の可い、豪勢なこと出来るもんぢやあない。

小陰で見たら寒くツて堪らないので、もう入つて寝ようかと思つたが、鮫屋さんといふ、いろを思出しちや、料簡出来ないから、其まんまでぶらり／＼來たわけだ。」

「へ、何、そんなこツて、ひとりものをお賞めになるんですか。御串戯もんですぜ、私あ眞劍だつた。」といつて、ぎうと一ツ上下を返して握つた、鮫屋は拍子ぬけのした形で黙る。

人通はちつともない。

處へ笛が聞えた、急に、短い、迫つた、節の無い調子で、高かつた、が次第低になつて音が消えた。

「御亭主。」

「とやゝものいはないで居た客は呼びかけたが、亭主も耳を澄まして居たから、確にいまの笛を怪んで言ふのであると思ひ取つた。」

「旦那口笛です。」

「何うも左様らしいよ、盗賊でもつかまるのか。」

「何とも分りませんな。」

「然ういや、さつき此先であの火の番といふんだらう、鳶のものゝ装束で二人兩側を歩行いて居た。」

「すつかり身體を鎧つて、玄武、朱雀といった將軍のやうな威勢がある。晝間は、たゞの少い者なんだらうけれど、きまつて出た處は指一本させるんぢやあない。きび／＼した心持の可い恰好だ。女房があつちや、矢張あんな眞似は出来なからう。男だけれどほんとに惚々するよなあ、「といひかけたが、フト其口をつぐんだ、客は屋臺のうしろに腰かけたまゝ、捻向いて通を見た。」

「すぐ其耳近にまた笛の音がしたのである。見ると、此店を十間とは隔たらない、此方側は塀に沿ひ、幅

六間の町を挟んで、向側は屋ならびの軒下を、おし
寄せるが如く、静かに、火の番が二人で来る。

また笛が聞えたが、確に向側のものゝ口からと思
はるゝ。但近づいたにもかゝはらず、此度は細く、
幽かに、極めて短かく響いた。

が、やがて来るともなく、来らざらんとするでも
ないやう、自然に、悠々として、件の結束した灰色
に水を浴せたやうな月下の姿は近くなつた。ト思ふ
と、はやくも屋臺に釣つた洋燈の灯の中に、小作で
細りしたのが明るくなつて、思ひがけず目のさきへ
立停まる。

「入らつしやいまし。」と透かさず聲を懸けて、
 新來の客を迎へた亭主は、吃驚して呆れた、美少年
 だと思つたのである。

「親方、もう晩いのね。」

と優しくいつて、新客は極めて普通に無意識に、
 婦女が癖として其鬢を搔上げるが如く、ふツかり被
 つて居た刺縫の兜を重いものゝやうに背後へ脱いだ。

「おや！」といはれて、新來の客は、天心の月を
 背中に浴び、屋臺の洋燈に照らされた。其瓜核形の
 輪郭の下頤のふつくりした、紅をさしたやうな唇の
 可愛らしい、しまつた、鼻筋が通つて、口許との間
 の目立つて短い。之は、ゆつたりした、氣の長い、
 悠々した、甘ツたるい、押の強い、間の伸びた、六
 七十まで生きようといふ田舎氣質の持たない相で。
 眉もキリツとした、うつくしい、はり切つたやうな
 清い目の、眦は切れてるけれど、まだ少いので、あ
 どけない故で、愛嬌がある。生際のくつきりとした、
 濃く、艶やかに房々とする髪を、構はず白の手拭で

向顔卷むかうはちまきをして居ゐるので、頭巾づきんの下しただから、思おもふさま
髪かみも亂みだれ、前髪まへがみも割われて、島田しまだの根ねが横よこに抜ぬけて、
いまにもばら／＼に成なつてがつくりしさうだけれど、
一筋ひとすぢもこぼれ懸からないで、すつきりした曇くもりのない晴はれ々々
しい顔かほが、暖簾のれんを潜くつて出でながら、嬉うれしさうに莞爾にっこり
した。

「氣きがつかかなかつたのねえ。」

「誰たれがお前様まへさん、は／＼は。」と鮪屋すしやの亭主ていしゅは快こころよげ
に笑わらつて身みを反そらした。頤おとがひの長ながい兀はげ上あつた額ひたひは、
屋臺やたいの屋根やねにかくれて、大口おほくちを開あいた。

其額そのひたひを下したから覗のぞいて、

「さあ、」

「え／＼。」といつた亭主ていしゅは、故ことらに此この「さあ、」
なるもの／＼何なにを意味いみするかを聞きかうとする。新來しんらいの

客きやくは促つなして、

「さあ、よ、親方おやかた。」といつた時とき、前後あとさきをちゃん
と見て、また振返ふりかへつて背後うしろを見みた。向側むかうがはの軒下のきしたに、
いま一人ひとの鳶とびは描えがかれたもの／＼やうに佇たんで居ゐる。

黄味きみを帯おびた月夜つきよの提灯ちやうちんに影かげも射ささない。亭主ていしゅは悠い悠う
然ぜんと構かまへ、切口きりこうじやう上で、

「珠ちゃん、何でございます。」

「あれだよ、さつさと、しと、甚さんが待つてるからさ。」

「へい、お連様がございますか、此方へ入らつしやれば可のに。」

「いゝえ、お腹の工合が悪いとさ。」

「また飲過ぎだ。」と亭主は合點した獨言。

「何うだか、」と投げたやう、珠は小手をはづした。大なのが、ばかりと取れて、片一方腰のあたりへぶらりと下ると、皮を剥いた筍の根よりも白い、細りした手を屋臺にかけた。胸のあたり纔に浅黄の半襟が刺縫の鎧から洩れて見える。

「頭アまだ抄々しく参りませんか。」といひながら、亭主は手の利いた握早に飯を撮んだ。

「だからチヨイと代に出たの。」

「何しと、お前さん故ツとでせう。とかくこんなことがお好きな風だ。え、珠ちゃん、またあのイギリス巻にいった、ひよる高いお嬢様に、お轉婆だつて

なぶられませぬ。お前さん、また口惜がらうと思つて、

「可いのよ、あのお嬢様はね、情人が出来ないもんだから口惜がるんだわ。」

「へい出来ませんか。」

「あゝ、」

「何故でせうな。」

「だつて學問があるとやらだからさ。長いのに肩掛を引張つて、煩ケしい顔をして晩方になると歩行してるわ。書籍を讀む目色だつて、嫌ぢやあないか。男の顔に字が書いてありやしまいしねえ。」

「變な目色だね。」

「あゝ、だからね、今井町の源さんの近所に、硝子戸の入った二階家があるわ。」と言が途絶える。

亭主はゆつくりと口を挟んで、

「待つて下さい、何だかお話が分らなくなりましてせ。

珠は些少も氣がつかず、

「何故さ。」

「えゝと、最初は其お轉婆でせう。それから其お嬢様でせう。あとが肩掛で、晩方で、書籍を讀む目色で、男の顔で、だから源さんの近所に硝子戸の二階窓は、分りませんね。」

「だからさ、」とセツツいて言ひかへした、珠は眞顔になつたが、思出したやうに、はつちりと「一ツ瞬した。」

「知らないよ、分つてるわ。」

「いゝえ、分りませんが一向。」とばかりけろり

として居る、トせき込んで、

「あら、左様ぢやあないの。」

「へい、何が左様ぢやございません。」 「まあ、お聞きつたら、じれつたい！」と支いた手に力を入れて、口惜さうに目を二つた。

「へい／＼なるほど、やれ、いそがしい、」とまた働く。

「彼處はね、貴賀さんてえの、何だか、學士とやらだわ。」

「なるほど、」と頷きかけたが、亭主は小陰に先刻から故とか不知、それとも極が悪かつたか、こゝに人がありと知られないやう、ひそまり返つて、ぐつと腰かけた胸を折つて、跨いだ火鉢に胸を載せるやうに俯向いて隠れて居る、お馴染の鼻眞の客は、てつきり其だと然う思つた。

氣色にも見せないで、

「なるほど、」と、あらためてモーツ言つて置く。
トつい釣込まれて、

「其貴賀さんにすツかり嫌はれてしまつたの。分

らないねえ、其お嬢様がさ。だから口惜がつてるんだわ。お邸は御身分が可いんだつて、あすこの竹どんが然ういつたわ、江戸ッ兒が目の敵だつて、睨むよ。華族さんは情夫が出来ないのかねえ。」

「ぢや、お前さんは出来るでせう。」莞爾して、

「お生憎よ。」とあどけなく小さな聲でちやんと言つた。

「其代り、此方は、さあ、出来ました。」と、うつくしく鯨を竝べる。

黙つて見て居て、珠は露ならでは觸れさうもない、白い、細い、節の立たない指を出して、動くとおあつらへに手が懸る。

「姉さん、お湯をあげませう。」

と此時聲がして、屋臺の灯の届かない隈に、床几に腰懸けたまゝの、今珠の口から言ひ聞えた、源が近所の二階家の硝子窓が住家である、其の貴賀文學士は、寝衣で潜出の胸から上を屋臺から見せて、かすりの綿入羽織と三枚重ねで揃つた八丈の袖口から、無雑作にづつと手を出したが、湯呑に番茶を汲んであつた。

口からむらゝと立つ白い湯氣は渦いて、屋臺店の片隅に束ねてある眞蒼な根笹を掠めて、この寒月の大路の屋根の下に、さも暖かさうに蔽ひかゝると、冷い風が横なぐりに珠が赤らめた顔に靡いた。

文學士は思ふことの無い打あけた音調で、

「御遠慮には及びません。」

「はい、」とかすかに會釋する、珠の聾はふるへたが、立直つてぢつと見て、

「難有う存じます。」とはツきりといふ、トいま取つたまゝの鮎を一個、後へ秘して竊と棄てた。

其まゝ中指のさきの節に、萌葱と、桃色と、柴と、赤と、白と、鳶色とで、きれいに綾をかけた裁縫用の指環を嵌めてるのを、臆せずと出して、そして貴賀の手から、湯氣の今淡くなつた茶碗を取つた。

「おい、まだなんかいい。」

と、のツそりと来て、背後で言つて、向側だつた恰服の可い鳶の者は、待兼ねたのである。

珠はハツとしたやうすで、手にしつかり持つた茶碗が揺れたが、横に立直つて斜めに顔をあげた。事ありげに見えるおもゝちながら、微笑んで、

「今よ。」と、一言いつたばかりである。

「親方、早くしてあげなせえ。」

「へい、」といつたが、何か不知、場が白けて、其處等工合が悪かつた。

「歯が痛いんでね。」

珠は活きた人形のやうな顔を傾けて、片々はまだはづさなかつた、刺縫の小手のふツくりしたので頬を支へる。

「だからお止なさいッてッたんだ。蟲齒だから左様でなくッてせえ痛むのに、鮓の立食は亂暴だ。なあ、親方。」

鳶の者は苦笑する。これは顔を知つた甚三であるから、鮓屋は事もなげに笑つて、

「何んなものでせうか。何しろ、手前あきなひます品物ですから、はゝはゝゝゝ。」

「む、そりや左様だ。だが珠ちゃん。」
「あら、私は食べやしないわ。」

「これから、やるのかね。」

「もう止しました、おゝ痛い。」と眉を顰める。

「頭巾を取つたから冷えたんだ。もう歸るんだから、我慢なさい。そして、其うがひをすると可いやね。え、うがひを。」

と勧められて、珠は何故か猶豫つたのである。

「熱かないんでせう、がぶりと、え、がぶりとお遣んなさいな。」

「だつて、」

「よくならあ、口をすゝくと紛れらあ、そして意地汚は止して歸りませう。」

「だつて、」と珠は困じたやうだ。鳶の者は氣が着かないから、

「ね、やつて御覽なさい、きつと可いんだ。」

「あの……だつて、」

「いゝえさ。」

茶は、こひしい學士が汲んで呉れたのであるから、

「私、御免よ、お前、」

「何もこれにあやまるて奴あねえ、なあ、親方。」

「然ればさ。」

「よう、珠ちやん。」

「御免なさいよ。」

「あら、御免なさいツて言はあ。」

「だからさ。」

珠はせん方なげに、打まもられつゝ、茶を含んだ。

文學士はちつと見た。鳶の者は引添うて、

「が、ガツとやつてお出しなさい。あゝ飲んぢや

つた。串戯ぢやあねえ！」

珠はあでやかに微笑んで、

「御免なさいよ。」

二人はならんで屋臺を出た。暖簾の外で、珠はまた頭巾を着たが、今度は左右に開かないで、鳶装束の二個の後姿は、姿をひとつにして身體を合せた。恰ど、さつき夫婦の藝人が竝んだやう。

月あかりに形は薄くなつた、が影を冴かに地に宿して、次第に町中を遠ざかる。鳶口の柄の影も見えた。

其時鮫屋の亭主は、うつかりして居た文學士を見返つて、顔を合せた。

「旦那、」

「怪しからん、」といつて、眞顔の構を破して、カラ／＼と笑つた。

微かに笛が聞える。

また口笛を鳴らした。

男が口笛を留めると、女は俯向いて歩行して居た顔をあげた。

「ちよつと、威勢が悪いなんて云つてないで、早く私を女房にしておしまひよ。」

「え。」

「然^さうでない^と、私^{わたし}、氣^きが變^{かは}るもの、岡^{をか}惚^{とほ}が出來^{でき}たもの。」

【完】